本年度学校教育の努力点とその推進計画

１　研究主題

わくわくしながら課題を解決しよう

２　研究のねらい

名古屋市の全ての子どもが学びを通して自分らしく、幸せに生きていくことができるよう、学びの基本的な考えが「ナゴヤ学びのコンパス」として示された。この中で、子どもたちが必要に応じて、仲間や大人の力を借りたり、自分の力を貸したりする「ゆるやかな協働性」のもとで一人一人が自律して学び続けている姿が、目指したい子どもの姿として記されている。さらに、重視したい学びの姿として「自分に合ったペースや方法で学ぶ」「多様な人と学び合う」「夢中で探究する」の３つが示された。

本校の児童は、自ら課題を見付けようとしたり、課題解決に向けて自分なりに方法を考えようとしたりといった、主体的に学習に取り組むことに課題が見られる。学習に対する苦手意識から、学習＝面白くない、というイメージをもってしまっている児童も多い。これは、課題を自分事として捉えることができていないことや、学びのゴールに対する見通しをもつことができていないことが原因として考えられる。

そこで、今年度より、生活科及び総合的な学習の時間において、探究的な学習に重点を置いて研究を進めることとする。子ども自身が課題に対する「問い」と具体的な「ゴール」を設定し、情報を収集して、整理・分析、まとめ・表現する一連の流れで学習することによって、夢中になって探究する児童の育成を目指したい。今年度はまず、課題の設定（「ふれる」→「問いの設定」）に焦点を当て、学習対象との関わり方や出会わせ方の手立てや、自分事化した「問い」を設定できるような手立てを工夫して研究に取り組む。児童が「解決したい」「知りたい」という「問い」を見付けることができれば、学びのゴールに向かって“わくわく”しながら主体的に学習に取り組むことができると考える。

また、生活科及び総合的な学習の時間における探究的な学習方法を学ぶことは、他教科の学習においても、自ら課題を設定し、解決していこうという主体的な学習態度を養うことにつながると考える。

さらに、人と協働して学習し、学びを推進するためには、組織の中で自分の考えや気持ちを誰に対しても安心して発言できる状態である「心理的安全性」(1999　エドモンドソン)が確保されていることが必要である。「心理的安全性」を重視した人間関係づくり、学級づくりも行っていく。

３　推進組織

校長・教頭

推進委員会
教務主任・推進委員長・推進委員（各部部長）

全体会

特支部会	低学年部会	中学年部会	高学年部会
特支担任・通級指導	１年・２年・日本語指導	３年・４年・養護	５年・６年・校務主任

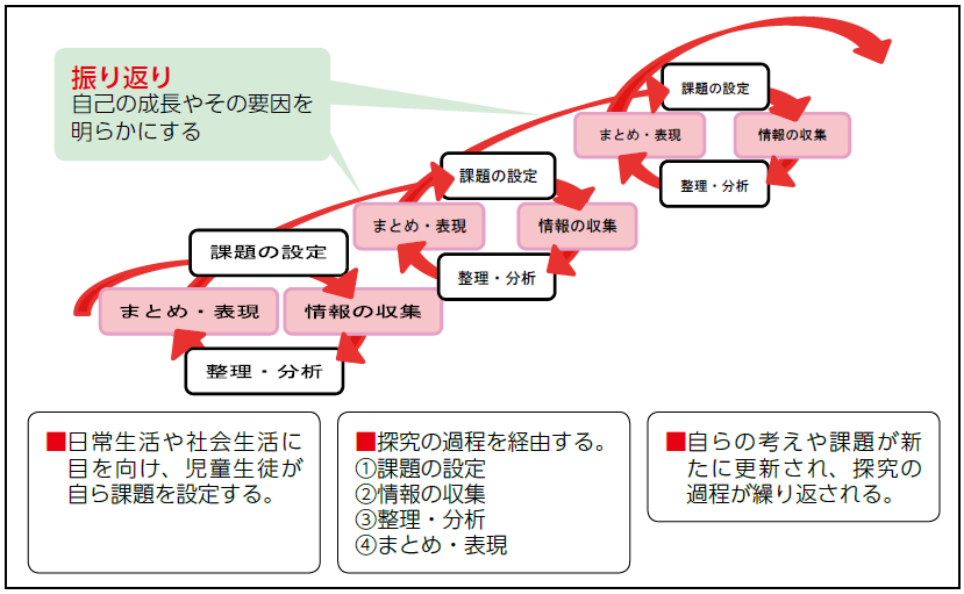
４　推進計画

月	日	曜	主な内容	
4	8	月	努力点推進委員会①	今年度の方針・計画確認
	11	木	全体会 学年会	今年度の方針・計画決定 大テーマの思案、カリマネの作成(～19 日)
	19	金	努力点部会①	大テーマ検討、「ふれる」の計画 デザインシートの立案(～5/22)
5	16	木	現職教育	「テーマ（未定）」奥村先生
5	22	水	努力点部会②	「ふれる」・単元計画の検討
7	18	木	努力点推進委員会②	各部会の状況報告、中間報告について 講師（未定）
7	19	金	努力点部会③	「問い」設定の手立ての検討、１学期の振り返り 中間報告書作成〈各学年〉（～9/6）
9	19	木	努力点部会④	「問い」と「ゴール」について状況報告
10	3	木	全体会（中間報告）	進捗状況の確認
12	19	木	努力点推進委員会③ 努力点部会⑤	各部会の状況報告、最終報告について 状況報告、２学期の振り返り 最終報告書作成〈各学年〉（～1/31）
2	14	金	努力点推進委員会④	今年度の反省、次年度について
	20	木	努力点部会⑥	状況報告、１年間の振り返り
	27	木	全体会（最終報告）	１年間の振り返り
3	13	木	職員会	次年度研究主題・推進計画の提案

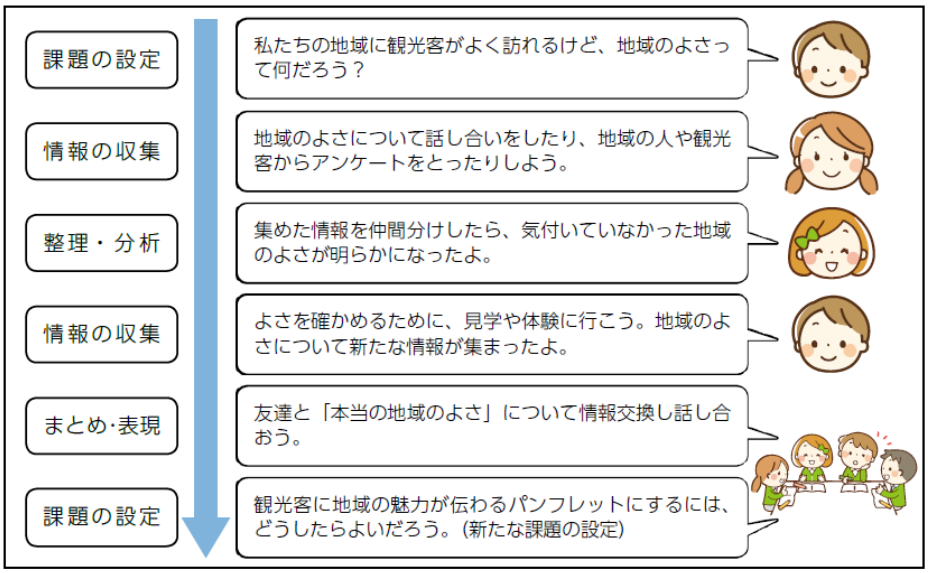
５　目指す児童像

探究的な学習とは、基本的には「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」など、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていくことである。これは、段階的な学びではなく、循環的な学びであるので、基本的な学習サイクルを必ずしも順番通りに進める必要はない。明らかになった考えや意見などをまとめ、表現し、そこからまた新たな課題を見つけて問題を解決したり、最初に知っている情報をまず整理・分析してみて、足りない情報があると気付いたら、それを収集したりすることも考えられる。また、研究ではないので、立派な成果を求めるのではなく、この４つのプロセスを踏むことを重視する。学びを「探究モード」に変革していくことがこれからの社会で求められている。

探究的な学習の過程



探究的な学習の過程の例



引用・参考資料　学習指導要領「総合的な学習の時間編」　　熊本県教育委員会「教育課程」
教育技術 HP　田村学「今、求められている『探究の授業』とはどのようなもの？」

生活科における「探究」とは、総合の４つのプロセスを踏むというよりも、子どもたちの思いや願いを大事にして、それを実現していくことに力点が置かれる。例えば、「もっときれいな花を咲かせたい」から栽培活動に取り組んだり、「おもちゃをもっと速く走るように工夫、改善したい」からおもちゃ作りに没頭したりすることが大事である。生活科は、体験そのものが重視されるが、その体験で得たものを言語化することによって、より確かな認識に至ることが重要なポイントである。

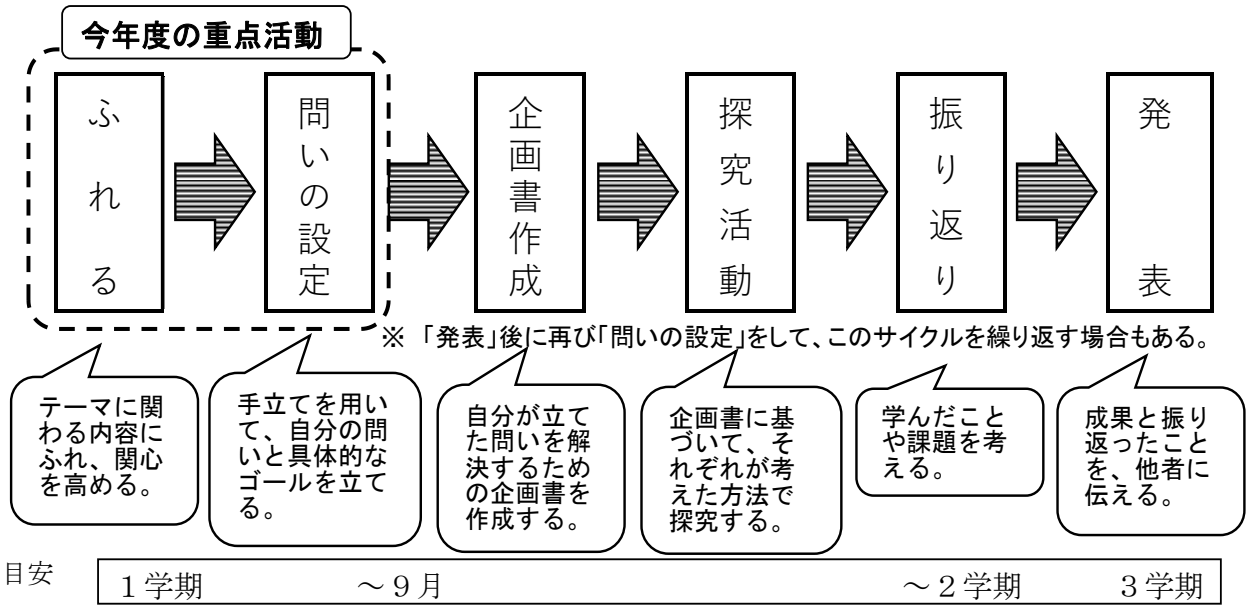
６　研究方法と内容

(1) 福春小における探究的な学習について

今年度は、まず、「ふれる」→「問いの設定」に重点を置いて、探究的な学習のサイクルを１年かけて回すことを目指す。

１・２年生は生活科、３～６年生は総合的な学習の時間において、探究的な学習の時間を「クエストタイム」と呼ぶ。各学年の内容は、１・２年生は生活科の単元、３年生「身近な地域」、４年生「福祉」、５年生「国際理解」、６年生「キャリア教育」とする。

【探究的な学習の流れ】



【探究的な学習を通して育成を目指す資質・能力】

つけたい力	具体的な姿
発見する力	・生活や学習の中から疑問を発見することができる。 ・自分ごと化した問いをもつことができる。
計画する力	・解決のための見通しやゴールをもつことができる。 ・解決のための計画を立てることができる。
探究する力	・必要な情報を集めることができる（低学年） ・集めた情報を分類し、整理することができる。（中学年） ・集めた情報を整理し、情報と情報の関係を考えることができる。（高学年）
ふり返る力	・学んだことを生活や学習に生かすことができる。
表現する力	・伝えたいことを相手にわかりやすく伝えることができる。

(2) 日常実践

週１回、火曜日の朝の時間に「アドベンチャータイム」を設定し、１０分程度、心理的安全性を高めるような活動を行う。活動例として、「もしもしかめよ」などの手遊びや「落ーちた、落ちた」などの定番ゲーム、ペアトークなど、手軽に取り組めるものから、「学級ゲーム＆アクテビティ 100」【2013　ナツメ社】に記載されているアクテビティや構成的エンカウンターのエクササイズを行う。いずれの活動においても、重要なのは、「失敗してもよい」「自分が認められる」と思えるようにすることであり、活動して終わりはなく、振り返る時間を必ず設けるようにする。